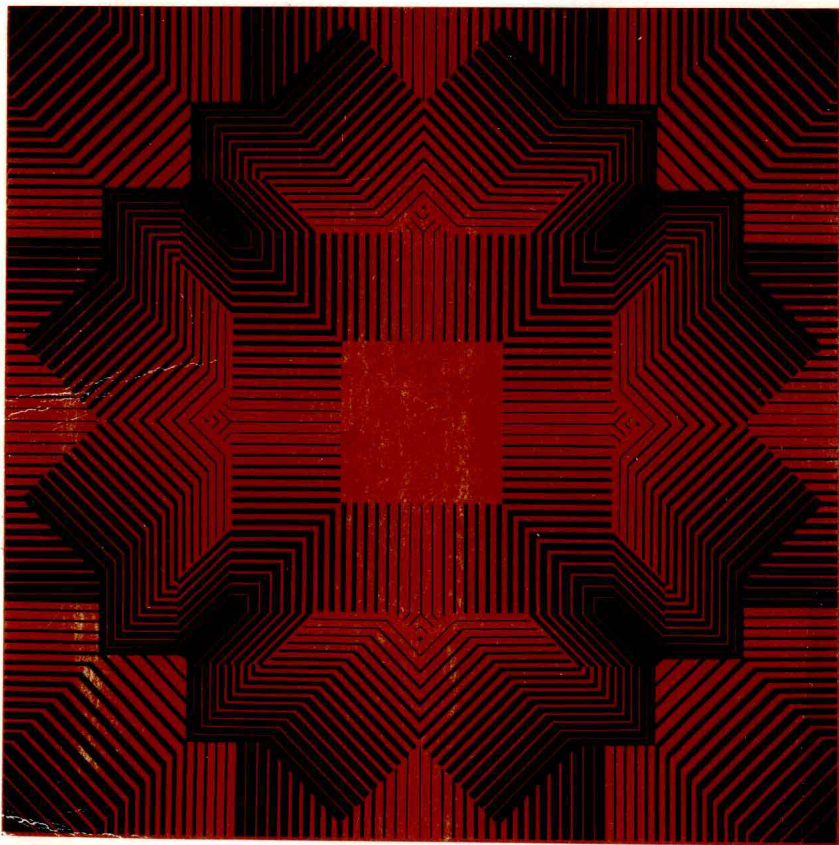


イギリス中世文学の聖と俗

斎藤 勇

SEKAISHISO SEMINAR



SEKAISHISO SEMINAR

イギリス中世文学の聖と俗

斎藤 勇

世界思想社

〔著者紹介〕

斎藤 勇 (さいとう・いさむ)

1929年 京都市に生まれる

1950年 同志社大学文学部卒業

1952年 同志社大学大学院文学研究科修士課程修了

1964年 同志社大学大学院文学研究科博士課程修了(文学博士)

1971年 ケンブリッジ, ユニヴァーシティ・コレッジにて中世英文
-72年 学を研究

現在 同志社大学文学部教授

著書 *A Study of Piers Plowman with Special Reference to
the Pardon Scene of the "Visio"* (南雲堂, 1966)

『中世のイギリス文学——聖書との接点を求めて』(同, 1978)

『カンタベリー物語——中世人の滑稽・卑俗・悔悛』(中公新書,
1984)

編著 (共編)『チョーサーとキリスト教』(学書房出版, 1984)

『文学とことば——イギリスとアメリカ』(南雲堂, 1986)

『中世イギリス文学と説教』(学書房出版, 1987)

イギリス中世文学の聖と俗

定価1,950円(本体1,893円・税57円)

1990年5月10日 初版発行

著者 さいとう いさむ
斎藤 勇

発行者 高島 国男

世界思想社

本社 京都市左京区岩倉東五田町77
電話(721)6506~7 振替京都0-2908
東京支社 東京都千代田区猿楽町1-4-8
松村ビル

©1990 I. SAITÔ Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替いたします (共同印刷工業・藤沢製本)

ISBN4-7907-0369-X

イギリス中世文学の聖と俗 ● 目次

序論―聖書釈義的批評は々非々…………… 3

1 聖書釈義的批評とは 4

2 チョーサーの聖書釈義の知識 9

3 チョーサー作品の聖書釈義的解釈のころみ 12

4 聖書釈義的批評は有効か 21

I チョーサーと説教文学…………… 27

1 罪をたずねて…………… 28

1 教会と日常生活 29

2 教会と説教 31

3 第四回ラテラノ公会議 34

4 聴罪手引書 37

5 『修道女の心得』 39

6 チョーサーの「司祭の話」 43

7 ロバート・マニングの『罪を論ず』 46

8 チョーサーの「托鉢修道士の話」 49

2 聖女セシリア伝——説話の系譜……………57

1 説話とは……………57

2 聖人伝……………70

3 チョーサーの聖女セシリア伝……………74

II チョーサーと教会……………85

1 放屁と聴罪——托鉢修道士の災難……………89

1 良心をまさぐること……………89

2 家に入りこむ托鉢修道士……………94

3 屁の十二等分……………99

2 実を取り、殻を捨てる？——雄鶏と狐の教訓……………103

1 聖書釈義的批評への招待……………103

2 聖書釈義的批評は可能か……………105

3 いろんな要素の早変わり……………111

Ⅲ 中世文学の女性……………119

1 エバとマリアと貴婦人と……………121

- 1 女性、罪の原因……………121
- 2 女性、救いの原因……………126
- 3 女性、恋の理想像……………130
- 4 女性、その現実生活の中で……………134
- 5 民衆のマリア帰依、されど男の本音は……………137

2 クリセイダの賢さ——「トロイルスとクリセイダ」論……………143

- 1 トロイルス物語の系譜……………143
- 2 トロイルスの恋愛道……………148
- 3 クリセイダの魅力……………153
- 4 クリセイダの性格とその背信……………161
- 5 板ばさみになったチヨースー……………175
- 6 「トロイルスとクリセイダ」、悲劇か喜劇か……………178

Ⅳ 宗教抒情詩……………187

1 文字は殺し、霊は生かす……………188

1 抒情詩の保存と伝達……………191

2 詩人の黙想……………197

3 世俗感覚と宗教抒情詩……………202

4 霊的婚姻の詩……………207

5 宗教抒情詩「一人の処女」評釈……………216

2 「わたしは恋に病んでいるゆえ」の詩——その霊的イメージ……………221

1 恋に病む……………222

2 「雅歌」的イメージ……………227

■参考文献……………236

●あとがき……………247

●索引（人名・事項・著作）……………

❖ イギリス中世文学の聖と俗 ❖

序論——聖書釈義的批評是々非々——

1 聖書釈義的批評とは

中世文学の批評方法の中に「聖書釈義的批評」というのがある。簡単にいうと、中世における聖書解釈の方法を文学解釈にも適用しよう、という一種の批評主義である。すこし堅いが、ひとつそれから始めて中世文学の聖俗の問題をのぞく窓としてみたい。聖書釈義的批評といえは、すぐにもプリンストン大学のD・W・ロバートソン教授の名が出てくる。しばしば、「ロバートソニアニズム」と、いささか意地悪く呼ばれている。ご本人は、よくいつしよに仕事をされるニューヨーク州立大学のB・F・ヒュッペ教授の名をとって、「ヒュッペイズム」と呼んでもいいのではないかとおっしゃっているそうだが、いずれにせよ、ご両人の共著、単著がいろいろな問題を提起してきた。それだけシヨッキングで影響力のある方法だということだ。ロバートソン自身は自分の批評姿勢を「歴史批評」と称している。「歴史批評」とは、「ある時代の文学の十分な理解に到達するために、その時代の文化理念の再構成を求める一種の文学的分析」（「歴史批評」、一九五〇年度コロンビア大学英語英文学研究論文集）所収、三頁）のことをいう。これに中世文学を据えてみると、中世文学は何よりもまず、教会によって知的に支配された世界の産物であるということが前提となる。十二世紀以来比較的安定した教理が、教養ある人々の共通の遺産となっていた。この中でも、最も重要な概念が「愛」であり、これに対立するものが「欲望」であると考ええる。ロバートソンは「愛」について、アウグスティヌス

ス（三五四—四三〇年）の『キリスト教の教え』を引用する。「愛」とは、「神を神ご自身のために、また自己と隣人を神のために享受することをめざす精神の運動」であり、「欲望」とは、「自己と隣人との他なにかの物体を、神のためでなしに享受することをめざす精神の運動」である（傍点筆者）。「キリスト教の教え」三卷、一〇章、加藤武訳、『アウグスティヌス著作集』六卷（以下、「教え」と略記）。これは、アウグスティヌスの有名な「享受」と「使用」の説をふまえている。「享受」とはあるものにひたすらそれ自身のために愛をもつてよりすごることである。ところが使用とは、役立つものを、愛するものを獲得することに関わらせることである。この場合愛するものとは、それに値するものでなければならぬ。ところが誤まった使用は濫用、あるいはむしろ悪用と呼ばれなければならない」（傍点筆者）。「教え」一巻、四章）。つまり、本来的に最も愛されるべきものは神である。したがって、ただ神のみが「享受」の対象である。地上のものはそのためにこそ「使用」されるわけで、地上的価値のためにのみ「享受」されるべきではない。感覚的地上美なども、真に愛されるべき対象を「享受」するために使用されるのだ。文学作品も例外ではない。「愛」、つまり人の子の救済のためにキリストのもたらしたまいし「新しい法」^{おきて}の推進のために詩を書くのが、詩人の義務であった。それでロバートソンは、現代人にとってはたいそう大胆な発言をする。

中世のキリスト教詩——ちなみに、キリスト教詩というのは、キリスト教徒である作者によって書かれたすべての真面目な詩という意味だが——は、さらに通常「世俗的」と呼ばれている詩と

えも含めて、愛のメッセージやなにかその系列のものが表面上はつきりしていなくても、アレゴリカル 寓喩的である。ソールズベリーのヨアンネスも主張するように、……およそいかなる書物も、それが「愛」を推進するのであれば読むに値しないのだ。（『歴史批評』、一四—一五頁）

ということになる。しかも、文学のモデルかつ淵源は聖書であるという考え方があり、中世文学の「歴史批評家」は聖書釈義の伝統に親しむことが必要となってくる。歴史批評と聖書釈義的批評とは、こうしてつながってくる。この結びつきには次のような必然性がある。つまり、聖書は「愛」以外を教えない。逆にいえば、「欲望」以外を咎めない。これは歴然としている。聖書の大部分、特に『旧約聖書』は、この「愛」のメッセージを曖昧な仕方では伝える。だから、このメッセージが表面上明白でないときには、解釈に頼らなければならないことになる。およそ名辞には複数の意味解釈がつきまとう。一つには言葉上の意味、次にはものとしての意味である。言葉上の意味はすんなり理解されるとしても、聖書に言及される多くのものは、他のなにかの意味を伝えるサインだと考えられている。「エルサレム」という名辞の言葉上の意味は「平和の町」であっても、他のレベルでは、それは実在の町であるがゆえにサインとしての意味をもつ。すると、人間の最高の安堵を指示する意味をもちはじめ、ある時には教会を、ある時には天国を意味したりする。サインとしてのものは、一つだけでなく同時に複数の意味を伝えることもあるが、これは聖書の当該箇所によって決まってくる。

こうして、聖書に出てくる多くの名辞には、核になる意味と、それをおおう表面的な意味とがある。アウグスティヌスの場合、表面上の意味と核になる意味は、「さや」と「種」・「実」との比喻で説かれる。文字、つまり表面上の「さや」のままでは、詩の妙なる調^{なま}べは、振ってみてカラカラ鳴るだけで、偽りである。より高い神の秘義を知るためには、その外部の「さや」を取りさつて、真理という中身を味わわねばならない。中世スコラ哲学者、サン・ヴィクトルのフゴ（一〇九六—一二四一年）の言葉を借りると、「センテンシア」（「真意」というほどの意味）を取り出すことである。アウグスティヌスはこのように言う、「いかにも皮はやわらかだが、このさやをゆすると、石のように固い豆が音をたてる。こんなものは人間の食べ物ではなくて、家畜のえさでしかない」（『教え』三卷、七章）。およそ比喩的意味は、そしてその秘められた真の意味は、「愛」の養分としての「種」・「実」であるから、「さや」から取り出されねばならない。パウロが「文字は殺しますが、霊は生かします」（「二コリ」三、六）と語るとき、「さや」が「種」・「実」をおおっているように文字は霊をおおい隠している、という前提がある。「さや」を食するということは動物になるということである。「実」を食べることにこそ真に人間的なことである。理性を「使用」するものは「さや」を捨て、霊の「実」を「享受」することになる。文字は「使用」されるべきで「悪用」されてはならない。キリスト教徒としての詩人の義務は、たとえ比喩が聖書由来であろうと、異教伝統に属するものであろうと、そのいかにかわらず、こうした解釈の示唆をすることである。およそ、中世、さらにルネッサンス期もかなり入った頃までは、芸術作品は人間の精神を霊的理解に導くように仕組まれているのだ。たとえばアウグス

ティヌスは、諸聖人、つまり気高く完全なる人々を、「教会という齒」にたとえ、さらに「毛を剪られた雌羊」という比喩的表現で言いあらわす。この比喩的表現は、「わが愛でし女は、赤き赤き花薔薇」式の比喩と区別されなければならない。聖書釈義という比喩的表現は、その効果を二つの対象物の情感的な比較によつていのではないからだ。諸聖人が「教会という齒」だということは、「人々を誤謬から切り取る」からであり、なぜ「毛を剪られた雌羊」かといえば、「この世の重荷」を取り除いてくれるからである（『教え』二巻、六章）。ここでの二つのイメージの比較は知的である。表面的な言葉上の表現（さや）の中に隠された「霊的意味」（実）の知的な認識であつて、花薔薇と恋人との間に介在するような情感的一致をふまえたものではない。こういう知的な分析努力への協力はまだ、読者の義務でもある。したがつて、聖書釈義的解釈は情的楽しみではなくて、知的な愉快さでなくてはならない。理性による楽しみである。

こうした比喩的表現の解釈は、中世の聖書釈義家の著書の中に豊富に提供されており、またそれらが消化されて、教会での日常の説教の中に組みこまれ、一般信徒の間に普及している。十二、三世紀に歴代教父（キリスト教古代のすぐれた著述家の呼称で、学徳すぐれ、護教的立場をもつことが前提）の聖書釈義が編纂、追加され、中世において「聖書の舌」、「スコラティシズムのバイブル」とまで呼ばれた『グロッサ・オルディナリア』（『正則聖書釈義集』）や、十四世紀イギリスのドミニコ会修道士ジョン・ブルムヤード（一二三五年頃没）の『説教大全』などは、そういった説教の標準的な集大成であり、説教者のマニュアルであつた。ラテン語の読めない俗信徒たちも、ミサ聖祭や、諸教父の著書をふま

えた説教マニユアルを濾過してきた母国語による説教などによって、大量の聖書のイメージに親しんでいたと考えてもよい。ヒエロニムス（三四七頃—四二〇年）、アウグスティヌス、グレゴリウス一世（在位、五九〇頃—六〇四年）、ベード（六七三—七三五年）、ラバーヌス・マウルス（七八〇頃—八五六年）、サン・ヴィクトルのフゴ、リルのアラヌス（一一二〇頃—一二〇二年）、ペトルス・ベルコリウス（一二九〇頃—一三六二年）など、錚々たる教父、教皇、神学者の名前があがってくるし、信徒（すくなくとも「インテリ」と称してもよい人々）は、これら教父、神学者たちの名前と説教における釈義とが一致しなくても、伝統的聖書釈義についての日常的知識をもっていた、と考えるところから、ロバートソンやヒュッペの聖書釈義的中世文学批評は出発するのである。

2 チョーサーの聖書釈義の知識

かりに、中世の詩人がことごとく、こうした「実」、センチシアの伝達を意識して執筆した、と考えると、中世後期のイギリスの最も代表的な詩人であったチョーサー（一三四六頃—一四〇〇年）などはどうであつたか、ということになる。ここで、チョーサーを中心として、この聖書釈義的批評を考えてみることにする。結論は今差し控えるとしても、すくなくともチョーサーは、この種の釈義というものは心得ていたにちがいない。作品における片言隻語へんげんせきごから推察すると、そのことがわかるのである。